第五十回城戸賞応募作品

ゼクエンツ

森川　真菜

【あらすじ】

数年前、児童へ加害行為をしようとした前科を持つ岡部正敏。弟の圭の友人であり、医者の高木道人の元で治療に励んでいた。圭には妻の智子と幼い娘がいて、正敏の存在はひた隠しにしている。

正敏は内職で金を工面しているが生活は厳しく、ピアノの訪問レッスンを始める。訪問先の生徒と共に心安らぐ時間を過ごしていたが、ある時その家には幼い孫娘の未来が住んでいる事が発覚する。

ある日、正敏は困っていた少女に対して、純粋な気持ちで手助けをする。診察で自分は治ってきていると話すが、道人に諭される。

一方、圭は診療費を払いに道人の元を訪れる。正敏を連れて家族で出掛けようとする圭を道人は止める。

圭は正敏の自宅を訪れた際、彼が隠している児童ポルノに気付く。全て回収して自車のトランクに隠す。

そんな中、事件は起こる。

ピアノを弾きたがる未来に動揺した正敏は、部屋から追い出す。すると未来を追いかけた祖母が転倒し意識を失ってしまう。未来と二人きりになり、正敏の中に良からぬ感情が湧き出す。未来をトイレに閉じ込める正敏。

その頃、隠していた児童ポルノに智子が気づいてしまう。問い詰められた圭は、正敏の秘密を打ち明ける。二人は話し合うが分かり合えず、圭は兄を探すと智子を車から降ろす。歩いて自宅まで帰る智子。

正敏も圭を求めてマンションまで来ていた。不意に出くわしてしまった二人。自らの意見を主張するが、ついに折り合えない。圭が帰宅し、正敏は未来を閉じ込めたことを白状する。圭は慌てて訪問先に向かい、謝罪する。

正敏は死を決意し椅子に登る。向かいの家の小さな赤子が目に入る。彼は、生きたいと願ってしまう自分に絶望する。

翌週。謝罪の為に道人の元を訪れた智子。

自らが受けた過去の被害を打ち明ける道人に対して、智子は、正敏にＧＰＳを装着出来ないかと相談する。

次の診察で、正敏の内なる加害性が明らかになる。道人は向き合う決意を新たにする。

正敏は生きることを選択する。ピアノを諦め、パチンコ店でアルバイトを始める。もう彼の耳には、騒音しか響かない。

【登場人物表】

岡部正敏	（40）	兄
岡部圭	（32）	弟
岡部智子	（35）	圭の妻
岡部由依	（3）	圭の娘
高木道人	（33）	医者
大里ヨシエ	（70）	生徒
飯沼恵子	（45）	生徒の娘
飯沼未来	（6）	生徒の孫

○木の幹

厚みある樹皮の上、蝉の幼虫がいる。
背中の縦の裂け目から、頭が出てくる。
やがて完全に羽化し、蝉が飛び立つ。
幹には、抜け殻だけが残される。

○木村楽器店前

店内にグランドピアノ。
ピンスポットが当たり、輝いて見える。
ショーウィンドウに映る、恍惚とした表情の男。
岡部正敏（４０）である。
子供の声がして、振り向く正敏。
保育士に連れられた園児たちが、賑やかに歩いている。
正敏、園児を避けるように、そろりと脇道に入る。
長く続く塀の影を、足早に歩いてゆく。
その背中、蝉の鳴き声が響いている。

○さらりクリニック・ロビー

どんよりとした空間。
ソファに患者たちが座っている。
その隅、床を見つめる正敏。
受付の声「岡部さん、岡部正敏さん。診察室三番です」
正敏、顔を上げる。

○同・診察室

無機質な室内。
すり硝子の窓から、光がさしている。
正敏「……ピアノの、羽の部分です。棒を立てて開ける屋根のところ」
正面で、白衣姿の高木道人（３３）が頷いている。
正敏「あれを開けた時の音は、本当に聴こえが違うんです。その……音がはっきりするというか」
道人「なるほど。それで、そのグランドピア

ノが欲しいと？」
正敏「はい。……ただの夢ですが」
道人「まあでも、そういった物が欲しいとなれば、お金が必要な訳ですから。まずは仕事に就けるよう、ちゃんと再犯防止に努めましょう」
正敏「……」
道人「最近は、児童と会う機会は？」
正敏「いえ、特には」
道人「特には？」
正敏「あ、いや……内職なので会うこともないですし、外では、その、見ないようにしています」
道人「内職ばかりでストレスはないですか？」
正敏「今の所は、大丈夫です」
道人「よかったです。思い出したくもないかもしれませんが、以前、加害行為のきっかけとなったのは職場でのストレスでしたよね？」
正敏「……はい」
道人「ですので、難しいとは思いますが特にそういった点には注意を払ってください。一人で抱え込まないように」
正敏「……」
道人「何かあったらすぐ弟さんに連絡すること」
正敏「はい」

○同・ロビー
受付で、予約をとっている正敏。
受付「次回も水曜日でよろしかったですか？」
正敏「はい、水曜日の十三時で」

○同・診察室
正敏のカルテを眺めている道人。
『午後四時頃、当時四歳の男子児童に公園で話しかけ――』等とあり。
道人、暗澹とした表情に変わってゆく。
道人「……」

○正敏のアパート・外観（夕）
老朽化した三階建てのアパート。

○同・部屋（夕）
七畳ほどの部屋。
パイプベットに小さな机、古い電子ピアノがある。
大量の本や漫画が整然と並ぶ中、内職をしている正敏。
小さなポリ袋に、金色の縁起物を詰めていく。
段ボール箱には、無数のおみくじ。
インターホンが鳴り、立ち上がる正敏。

○同・玄関（夕）
扉を開けると、若い配達員。
部屋にあった段ボールを渡す。
代わりに、配達員から段ボールを受け取る。

配達員「どもー」
扉が閉まる。
箱の上、求人冊子がある。

○同・部屋（夕）
正敏、冊子をペラペラとめくる。
途中、手が止まる。
『シッター募集！　未経験者歓迎！』

正敏「……」
首を振って冊子を投げ出し、内職に戻る。
繰り返し、繰り返し、詰めてゆく。
ポリ袋から外れた金色の招き猫が、冊子の近くにぽとっと落ちる。

正敏「……」
招き猫を拾いつつ、冊子を手繰り寄せる正敏。
乱雑にめくると、『出張ピアノ教室』の広告が目に入る。
冊子から履歴書を切り離し、ペンを握り、机に向かう。

が、部屋の暗さが気になり、灯りをつけに。
窓際、カーテンを閉めようとして、向かいの一軒家が目に留まる。
見下ろすと、玄関に帰宅した様子の夫婦。
妊娠中の女に寄り添って歩く男。
静かな目で、見入る正敏。

○木村楽器店・外観（夜）
商店街の一角、明かりの灯る楽器店。

○同・店内（夜）
こじんまりとした店内。
壁にギターが掛けられ、いくつかピアノが並ぶ。
中央の立派なグランドピアノを、客の一人が弾いている。
横目で気にしながら、店内を物色している正敏。
品出し中の店員を見つけ。

正敏「あの……」
店員「はい」
正敏「ここは、バイト足りてるの？」
店員「え？　あ、えっと、この時間は二名体制で。すみません」
正敏「いや、そうじゃなくて。募集とかは、してないの？」
店員「あー、今だと土日とかなら」
正敏「夜は？」
店員「まあ、夕方とかであれば」
正敏「七時いや、八時くらいからだと？」
店員「うち九時には閉まるんですよ」
正敏「ええ」
店員「いや、だからその、一時間だけってのはちょっと（と苦笑）」
正敏「そうですか」
立ち去る正敏。
首を傾げている店員。

○正敏のアパート・部屋（夜）
正敏、帰宅して電気をつける。
机の上には、書きかけの履歴書。
正敏「……」

○飯沼家・玄関前
小さな庭付きの一軒家。
『飯沼』の表札。
白いシャツにループタイ姿の正敏。
深く息を吸って、インターホンを押す。
女の声「はいはい、今行きますー」
扉が開く。
笑顔で出迎える、飯沼恵子（４５）。
恵子「お待ちしてました」
会釈する正敏。
恵子「（手招きし）どうぞどうぞ」
正敏「……お邪魔します」
緊張した様子で入っていく。

○同・居間
片付いた室内。
大里ヨシエ（７０）椅子に座り、庭を眺めている。
恵子、正敏と入ってきて。
恵子「お義母さん、いらっしゃいました。こちら（と正敏を見て）」
正敏「あ、岡部です」
恵子「岡部先生。思ったよりお若い方」
立ち上がるヨシエ。
ヨシエ「どうも、こんにちは」
正敏「（ぎこちなく）どうも」
ヨシエ、近づいてきて。
ヨシエ「綺麗ね」
と、正敏のループタイに触れる。
戸惑っている正敏。
恵子、見かねて。
恵子「ちょっと、先生驚いてらっしゃるから」
ヨシエ「そう？　別にいいじゃない」
恵子「すみませんね」
正敏「あ、いえ」

ヨシエ「これからよろしくお願いしますね」
と、頭を下げるヨシエ。
正敏「はい、こちらこそ」
正敏、合わせて頭を下げる。
恵子「じゃあ次、こちら来ていただいて」
正敏「あ、はい」

○同・和室
簡素な和室。
端に置かれたピアノの前に立っている
恵子と正敏。
恵子「これで大丈夫です？」
正敏、ピアノに触れながら。
正敏「ええ、すごくいいです」
恵子「よかった。お義母さんが急にやりたい
なんて言い出すから、つい買っちゃって」
しゃがんでピアノを見続けている正敏。
正敏「これ、中に弦があって」
恵子「はい？」
正敏「グランドピアノと同じなんですよ、中
身は」
恵子「へえ、そうなの」
正敏「これだとちょっと、音はこもっちゃう
と思うんですけど」
恵子「大丈夫ですよ。お義母さん好きでやっ
てるだけだから」
正敏「はい。まあでも、すごくいい音色だと
思います。いいピアノを選びました」
恵子「へえ、そうなの。でも本当に、お遊び
程度だから。先生も、お付き合いよろしく
お願いしますね」
正敏「ああ、はい……」

○マンション（夜）
静かな住宅街にある、六階建てのマン
ション。

○同・圭の自宅・玄関前（夜）
インターホンを押す正敏。
男の声「はい？」

正敏「あ、岡部です」
男の声「……ちょっとお待ちください」
女の声「誰―？」
男の声「大丈夫、俺行くから」
女の声「ほんと？」
男の声「うん、座ってて」
扉が開き、岡部圭（３２）が顔を出す。
圭「……何？」
正敏「今日、誕生日だよな」
圭「そうだけど」
正敏「これ」
安物のワインを差し出す。
圭「こんな、いいのに」
正敏「いや別に、安物だから」
正敏、所在なさげに体を揺らしている。
困ったように、ワインを受け取る圭。
圭「あの」
正敏「んん？」
圭「悪いんだけどさ」
正敏「うん」
圭「もうここには来ないでもらっていいかな」
正敏「え」
圭「ごめん」
正敏「あ、いや、これ渡しに来ただけだから」
圭「わかってるけど……」
正敏「……」
圭「じゃあ、今取り込んでるから」
扉がバタンと閉まる。
呆然と立ち尽くしている正敏。

○同・同・居間（夜）
暖かい照明に照らされた食卓。
食後の皿が並んでいる。
岡部智子（３５）と道人、斜め向かいに座っている。
智子「あの人、こっちから聞かないと何も話してくれないんだから」
道人「でも聞いたら話してくれるんでしょ？」
智子「まあ、そうだけど」
道人「じゃあ、いいじゃないですか」

智子「わざわざ聞かなきゃいけない手間に、
腹が立つの」
圭が入ってきて、智子の隣に腰掛ける。
何も言わず、グラスのワインを飲む。
智子、ほらね、と道人を見る。
笑う道人。
圭「なに」
智子「誰だったの？」
圭「んーなんか勧誘だった」
圭の肩に手を置き、
智子「今ね、高木くんに学生時代の話聞いて
たの」
圭「え、なんて」
智子「昔っから秘密主義だったって」
圭「え」
智子「誰にも内緒で先輩と付き合ってたんだ
って？（と笑う）」
圭「いつの話してんだよ」
道人「（笑って）圭は、いつの間にかひっそ
りと彼女つくってた」
圭「いいよ、そんな話は」
智子「何でそうやって隠すの」
圭「別に隠してる訳じゃなくて」
智子「じゃあ何」
圭「言わなかっただけだよ」
智子「なんで言わないの」
圭「聞かれてないし」
智子「それずるくない？」
圭「……」
道人「ま、誰しも何かしらありますよ」
道人、智子のグラスにワインを注ぐ。
智子「ありがと」
智子、ワインを一口飲んで。
智子「でもね、この人ね」
圭「もうこの話はおわり」
と立ち上がる。
智子「言わせてよ」
圭「はい、もうお開き！」
と片付け始める圭。
智子、圭を座らせ、皿を集めだす。

智子「はいはい、今日の主役は座ってて」
仕方なく、座る圭。
道人、腰を上げて。
道人「あ、僕洗いますよ。ご馳走になっちゃったし」
智子「お客さんも座ってて」
道人「……はい」
腰を下ろす道人。
智子、キッチンに向かう。
それを横目で確認し、神妙な面持ちで道人を見る圭。
圭「（小声で）さっきの」
道人「ん？」
圭「さっきのチャイム、兄ちゃんだった」
道人「……」
圭「流石に、入ってとは言えなかった」
圭、床で眠る幼い娘、岡部由依（３）を見る。
道人、複雑な表情で由依を見る。
道人「でもお兄さん、良くなってると思うけど」
圭「けど？」
道人「まあ、もう少し」
圭「もう五ヶ月だよ」
道人「そんなすぐに成果が出るものでもない」
圭「……」
道人「何年か通ってる人もいる。……一回捕まってうちに来て、それでも何度もやる人もいる」
圭「……」
道人「そんな風になって欲しくない」
圭、由依を見る。
由依、寝息を立てている。

○同・正面玄関（夜）
ロビーから出てきて、歩き出す道人。
智子、マンションから出てきて。
智子「高木さん」
道人、気付かずに歩き続ける。
智子「高木さん？（と肩に手をかける）」

道人、びくっとして手を振り払う。
道人「あ……すみません」
智子「こちらこそ、ごめんなさい……大丈夫？」
道人「ええ」
智子「これ」
智子の手に、ハンカチ。
道人「あ」
智子「洗面台にあった。忘れ物なんて珍しい」
道人「……申し訳ない」
ハンカチを受け取る道人。
智子、道人を見て。
智子「すごい汗……」
道人、ハンカチで額を拭う。
智子「暑いし、タクシーでも呼ぶ？」
道人「いや、大丈夫です。歩きたい気分で」
智子「そっか」
道人「じゃあ、わざわざすみません」
と歩き出す道人。
智子「あ、圭がまた隠し事しようとしてたら言ってよね（と明るく）」
道人「（苦笑して）はい」
智子「じゃあ、気を付けて」
道人、会釈して去っていく。
心配そうに後ろ姿を見つめる智子。

○飯沼家・和室
ヨシエが『きらきら星』を弾いている。
隣で聞いている正敏。
演奏が終わる。
正敏「これで一曲弾けるようになりましたね」
ヨシエ「先生が教えるの上手だから」
正敏「昔、教師をしていたもので」
ヨシエ「へえ、そうなの？」
正敏「ええ」
ヨシエ「もう、やめちゃったの？」
正敏「……ええ」
ヨシエ「どうして？」
正敏「まあ、大変な仕事ですから」
ヨシエ「そう」

ヨシエ、ふっと笑って。
ヨシエ「じゃあ、七十歳の生徒なんて厄介かしら」
正敏「……次の曲いきましょうか」
○同・居間
正敏とヨシエ、入ってくる。
食卓に、メロンが用意されている。
キッチンから出てくる恵子。
恵子「あ、どうぞどうぞ」
三人、席に着き、メロンを食べ始める。
恵子「この時期になるとね、姉からいっぱい送られてくるの。実家で作ってるんですけどね」
と、壁際に積み重ねられたメロンの箱を指す。
正敏「へえ」
恵子「いつも食べきれないくらいたくさん」
正敏「どちらですか」
恵子「ん？」
正敏「あ、ご実家は」
恵子「ああ。茨城のね、わかります？　霞ヶ浦の方なんだけど」
正敏「聞いたことあります」
恵子「何にもないとこなんですけどね」
正敏「そうですか」
ヨシエ「先生はどちらのお生まれ？」
正敏「僕はもう、……田舎の方で」
ヨシエ「田舎？」
正敏「ええ」
ヨシエ「どちらの？」
正敏「……それよりヨシエさんは、どうしてピアノを？」
ヨシエ「この歳になるとね、もういろいろ動かなくなってくるの。だから頭と指の体操（と笑う）」
恵子「いい脳トレね」
ヨシエ「そうそう」
恵子「先生は、もう長いことやってらっしゃるんでしょう？」

ヨシエ「小学校で教えていたのよね？」
正敏「……そうです」
恵子「へえ、若い頃から？」
正敏「はい……ずっと教師に憧れていて」
恵子「へえ。でもなんていうか……」
恵子、正敏を見る。
恵子「先生は先生って感じね」
正敏「はい？」
恵子「なんかこう、ずっとかしこまった感じ」
正敏「はあ……」
恵子「やっぱり立派な人は違うんですね」
正敏、強く首を横にふる。

○同・玄関（夕）
靴を履いている正敏。
恵子「お義母さん、楽しそうでした」
正敏「よかったです」
恵子「ずっと好きなこと出来なかったから、きっと嬉しいのね」
正敏「……」
恵子「先生は？」
正敏「はい？」
恵子「どうでした？」
正敏「ああ……僕も楽しかったです」
恵子「じゃあよかった。また来週もお願いしますね」
正敏「はい、お願いします」

○同・玄関～路地（夕）
玄関前で、手を振る恵子。
会釈をして、門から出ていく正敏。
背を向けて、歩き出す。
その耳に――
少女の声「ママ！」
正敏「――！」
思わず足を止める正敏。
おそるおそる、振り返る。
ランドセルを背負った飯沼未来（６）の姿。
正敏「……」

門の傍に立つ恵子に抱きつき、そのまま家の中へ。
動揺している正敏。
足早にその場を去っていく。

○正敏のアパート・部屋（夜）
正敏入ってきて、乱暴に鞄を置く。
どこか落ち着かず、部屋をうろつく。
電子ピアノの電源を入れて、落ち着かせるようにゆっくりと演奏を始める。
バッハ『ゴールドベルグ変奏曲　アリア』

○マンション・圭の自宅・居間
洗濯物を畳んでいる智子。
着信音が鳴る。
テーブルの上のスマホを取ろうとする。
と、着信音が鳴り止む。
家事に戻る智子。
再度、着信音が鳴る。
風呂上がりの圭、入ってくる。
スマホを手に取り、部屋を出ていく。
横目で見ながら、何食わぬ顔で洗濯物を畳む智子。
圭、戻ってくる。
智子、畳みながら。

智子「だれ？」
圭「んー、会社」
智子「お兄さんじゃなくて？」
圭「え？」
智子「名前、見えたよ」
圭「……」
智子「なんかあった？」
圭「大丈夫、全然」
濡れた髪をタオルで拭く圭。
智子、圭にTシャツを投げつける。
圭に当たって、落ちる。
圭「え」
智子「なんかあるなら言ってよ」
圭「なんもないって……」

智子「知ってるからね、最近よく電話してるの」
圭「……」
智子「お兄さんとは仲悪いのかと思ってた」
圭「兄ちゃんさ……」
智子「うん」
圭「ちょっと今、病んでて」
智子「病んでる？」
圭、Tシャツを拾い、着ながら。
圭「なんていうか、鬱ってやつ？　不安定でさ、精神的に」
圭、智子と並んで座り、服を畳み始める。
圭「職場で色々あったみたいで。けっこう繊細だから」
智子「大丈夫なの？　仕事は？」
圭「今は、休憩って感じかな」
智子「ふうん……」
洗濯物の山を崩す智子。
ぽろっと出てくる、由依の小さな靴下。
智子「今度、どこか行ってみる？」
圭「え？」
智子「私たちとお兄さんで。気分晴れるかも」
圭「……」
智子、デニムのパンツを持ち上げて。
智子「あ、ほつれてる」
圭「ん？」
ほころび部分を示す智子。
圭「ほんとだ」
智子「直しとく？」
圭「あーうん、ありがとう」
智子「それで？」
圭「え？」
智子「お兄さん、どうする？」
圭「……聞いてみるよ」
水滴が圭の頬に垂れ流れる。

○さらりクリニック・ロビー
受付で話を聞いている圭。
受付「もし、毎回来られるのが大変でしたら、

銀行振込にもできますよ」
圭、書類を受け取る。
受付「ここに口座情報を記載していただければ、あとはご自宅からスマホとかで」
圭「ああ」
受付「申込も簡単なので」
圭「まあでも、もうそんなにかからないと思うんで大丈夫です」
書類を返す圭。
受付「かしこまりました」
道人、駆け足でやってきて。
道人「（受付の女性に）また？」
受付「はい……」
圭「（気づき）おう」
道人「もういいって言ったのに」
圭「いい歳して借りとか作りたくないし」
ため息をつく道人。
圭「ま、もうそんなかからないんだろ？」
道人「……」
圭「治ってきてはいるんだよな？」
険しい表情の道人。
圭を診察室へと促す。

○同・診察室
道人「完全に治るって難しいんだ」
圭「……じゃあどうしたら」
道人「ただ、何も犯さない日々を続けるしかない」
無言で俯く圭。
道人「彼も努力してると思う。でも、まだサポートが必要なんだ。何かしてしまいそうになった時に思い出せる人の存在が」
圭「……俺が面倒見る」
道人「一人で抱え続けるのは危険だと思う」
デスクの上の筆立てを見やる道人。
道人「ある患者が、この筆立てを見て言ったんだ。どこか見えないところへ仕舞ってくれませんかって」
圭「……」
道人「ああそうかと思って、俺はこれを仕舞

った」
筆立てからカッターナイフを出して、
白衣のポケットに仕舞ってみせる。
道人「そしたら、違うんです、って。何かと思った」
筆立てから、鉛筆を出す。
道人「こっちだったんだ」
圭「……」
道人、鉛筆を振りながら。
道人「これだけで子供を思い出しちゃう人もいるんだよ。……彼らはたった一本の鉛筆でも興奮できる」
圭「そんな」
道人「すべてが連想させるんだ」
眉間を抑える圭。
道人「お兄さんに対しては、こういう些細なきっかけでも連絡をするように言ってる。……ただ俺が全てに対応できるわけじゃない。本来はそのために社会があるべきなんだけど、全然足りてないから」
圭「……」
道人「残るのは必然的に家族くらいになる」
圭「……」
道人「……智子さんに相談してもいいと思う」
圭「言えるかよ」
道人「……」
圭を見つめる道人。

○飯沼家・居間〜玄関
メロンを食べる恵子、ヨシエ、正敏。
皮の際まで貪っている正敏。
恵子、ボソッと、
恵子「気持ち悪い」
正敏の手が止まる。
顔がこわばっていく。
恵子を見る正敏。
単にテレビを見ている恵子。
テレビには政治家が映っていて。
恵子「もうこの顔からして、何かしでかしそうじゃない？」

ヨシエ「確かに、悪そうな顔」
恵子、正敏を見る。
恵子「先生、まだあるから、新しいの食べてくださいね」
と、正敏の皿の上の皮を捨てる。
正敏、ゴミ箱に捨てられたメロンの皮を見ている。
と、玄関の開く音がする。
未来の声「ただいまー！」
元気な声に、慌てて立ち上がる正敏。
正敏「あ、あの、私はこれで」
荷物を手に、玄関へ向かう。
廊下に、未来が立ち塞がる。
対面する二人。
正敏「あ」
未来「こんにちは」
固まる正敏。
未来、返答を待たずにヨシエに駆け寄る。
未来「おばあちゃん、何してたの」
ヨシエ「んー？　ピアノのレッスン。未来もやりたい？」
未来「ピアノ？　やりたい！」
玄関、慌てて靴を履く正敏。
恵子、駆けてきて。
恵子「先生」
正敏、焦って扉を開けようとして、何かにぶつかる。
正敏「え」
倒れている三輪車。
正敏「（見ていて）……」
恵子「ごめんなさい、呼び止めちゃって」
正敏、三輪車を指して、
正敏「これ、ずっとここに？」
恵子「ええ。すみません、お邪魔ですね」
正敏「……」
正敏、倒れた三輪車を起こそうとするが、触れられない。
恵子「そのままで大丈夫ですよ」
正敏、伸ばした手を引く。

恵子「それより、これ持ってって下さい」
正敏「え？」
恵子の手には、メロン。
正敏「……いいんですか？」
恵子「気に入ってらしたから」
微笑む恵子。

○正敏のアパート・玄関前（夜）
圭、インターホンを鳴らす。
扉が開き、正敏が顔を出す。
圭「よっ」
正敏「おう……」

○同・部屋（夜）
正敏、キッチンのメロンを物陰に移す。
コップを持ち、圭の元へ。
圭、鞄からワインを出し、注ぐ。
圭「そういえば、洗濯機直ったの？」
正敏「何回か押せば動くようになった」
圭「そっか。冷蔵庫は？」
正敏「あれはまだ壊れてない」
圭「そっか」
二人、コップを合わせ、ぎこちなく飲む。
話が途切れる。
圭の顎を眺める正敏。
剃り残しがあり、触れようと。
避ける圭。
正敏「ちゃんと剃れよ」
圭、うつむく。
正敏「どうした」
圭「……」
正敏「何かあって来たんだろ」
圭「最近、出かけたりしてるの？」
正敏「（微かに戸惑いつつ）してないけど」
圭「そっか」
正敏「……」
圭「……あのさ、今度うちのと出かけない？」
正敏「智子さん？」
圭「うちの家族と」

正敏「……」
圭「動物とか好きで。だから動物園とか行けたらなあって」
正敏、ワインを一口飲む。
正敏「いいかもな」
圭「まあ、考えておいてよ」
圭、正敏の横顔を見つめる。
その背後、壁に吊るされたシャツとループタイ。
圭「（見つめていて）……？」
正敏、圭の視線の先を見やる。
正敏「……」
正敏、振り返り、圭の顔を覗く。
二人、目が合いそうになり。
正敏「あ、ピアノ」
と、勢いよく立ち上がる正敏。
圭「え」
正敏「弾こうか？」
圭「あー、弾いてくれんの？」
正敏「うん」
正敏、電子ピアノの前に座る。
バッハ『ゴールドベルグ変奏曲　アリア』を弾き始め。
正敏「いや、やめた」
と、手を止める。
圭「え、なんで」
正敏、戻ってくる。
圭「自分で弾くって言ったんじゃん」
正敏「もういい」
圭「何だよ」
正敏、ワインを飲む。

○飯沼家・和室
ヨシエ、ゆっくりとした手つきで、ようやく演奏を終える。
正敏「上達が早いです」
ヨシエ「本当？　よかった。そうだ、先生もなにか弾いてちょうだいよ」
正敏「え、なにかって」
ヨシエ「なんでもいい。聴いてみたいの」

困った表情の正敏。
当惑しつつ、演奏を始める。
『ケ・セラ・セラ』
ヨシエ、手拍子を始める。
しばらくして、襖が開く。
ランドセルを背負った未来が顔を出す。
恵子「こら」
後ろから制止する恵子。
構わず入っていく未来。
ヨシエに近づいていき。
ヨシエ「あら」
手拍子を始める未来。
正敏の演奏のテンポが若干速くなる。
次第に体を揺らし、踊り出す未来。
正敏、動揺して、手元が狂い出す。
気になり、ちらちらと未来を見る。
やがて塞ぎ込むように、演奏を止める。
一同、沈黙し、正敏を見つめる。
正敏「……」
正敏、別の曲の演奏を始める。
バッハ『メヌエット』
華やかなメロディに三人、聴き入っている。
未来、忍び足で正敏の方へ。
恵子「（小声で）こーら」
静かに鍵盤に触れる未来。
低い音が鳴り、不協和音が響く。
未来の顔を、正敏が覗く。
二人、目を合わせ、微かに笑う。

○洋服屋
正敏がポロシャツを選んでいる。
店員が通りかかる。
店員「何かお探しですか？」
正敏「いや」
店員「？」
正敏「……姪と動物園に行くので」
店員「あ、そうなんですねー。いやー、姪っ子ちゃんって、ほんっと可愛いですよね」
正敏「はい……」

店員「何でも買ってあげたくなっちゃいますよね」
正敏「ええ（と苦笑）」
×　×　×
正敏、棚に陳列された動物の刺繍のハンカチを見ている。
５歳ほどの子供が来る。
ハンカチを取ろうと、棚の上の方へと手を伸ばす子供。
しかし、届かない。
正敏、じっと見つめていて――。

○同・駐車場
店から出てくる正敏、一台の車に目を留める。
助手席に、先ほどの子供が座っている。
運転席の父親が何か怒声を浴びせている。
声は聞こえない。
縮こまる子供。
寂しい目をして佇む正敏。

○正敏のアパート・部屋（夕）
入ってきて、苛立ったようにショッピングバックを放る正敏。
電子ピアノの前に乱暴に座る。
荒々しく譜面を床に落とし、一心不乱に弾き始める。
ブルックナー『交響曲第八番』
次第に転調し、バッハ『メヌエット』へと変わる。
正敏、引っかかり、演奏を止める。
鍵盤の一つを押す。
音が出ない。
何度も押すが、出ない。
正敏、ため息をつき天を見上げる。

○木村楽器店・外観（夜）

○同・店内（夜）

壁の広告を見つめ、考え込む正敏。
『鍵盤　修理費15000円～』
背後、グランドピアノの前を通る客。
適当に鍵盤を触り、ポロロンと気の抜けた音が鳴る。

○さらりクリニック・診察室
道人と正敏が対面している。
道人「どうですか？　調子は」
正敏「……特に。普段通りです」
道人「児童と会う機会は？」
少しの間。
正敏「この間、服屋で子供を見かけて」
道人の声色が変わる。
道人「……それで？」
正敏「その子、困っていて。ハンカチがーー」
道人「ハンカチ？」
正敏「ハンカチが見たい様子だったんです。だからその、手助けを」
道人「手助け」
正敏「こう、見えるように（抱える仕草）」
道人「……抱えたってことですか？」
正敏「はい」
道人「……」
正敏「でも、その子にハンカチを見せてあげたくて。ただ、それだけです」
道人の表情が揺らぐ。
正敏「治療が効いてるんでしょうか」
道人「……もしも、ですよ」
正敏「はい」
道人「もしもその子が欲しがるものが、ハンカチじゃなかったら？　もしもそこが人目のある場所じゃなかったら？」
正敏「……」
道人「それでも行動しましたか？」
明らかに動揺している正敏。
正敏「……」
道人、真っ直ぐ正敏を捉える。
道人「認識を変えてほしいんです。子供に優しくしましょう、が目的じゃないんです」

正敏、眉間に皺を寄せる。
道人「まずはリスクを回避すること。次に、リスクに対処できること」
正敏「……」
道人「段階を踏んでいきましょう」
正敏「……はい」
×　×　×
道人、たくさんのメモが書かれた正敏のカルテを見ている。
項垂れて、頭を抱える。
と、いきなり、くしゃくしゃに丸め、壁に投げつけようとして、その手を止める。
道人「……（小さなため息）」
悲しげに、丸めた書類を広げる。
手のひらで、何度も何度もシワ伸ばす。
ノックの音。
看護師が顔を出して。
看護師「先生、次の方呼びます」
道人、書類のシワを伸ばしていて、答えない。
看護師「ちょっと時間おきますね」
道人「……大丈夫」
看護師「また声かけます（と去ろうと）」
道人「大丈夫だから、呼んで」
立ち止まる看護師。
道人、背を向けたままでいて。
看護師「……わかりました」

○マンション・圭の自宅・居間（夜）
由依、パンダのぬいぐるみで遊んでいる。
穏やかな笑顔で見ている智子。
ぼんやりとした表情の圭。

○さらりクリニック・ロビー
待機する患者たちの中に、圭の姿。
歩いてくる道人。
圭、立ち上がる。
圭「ちょっと」

道人「圭？　……どうした？」
圭「ちょっと時間取れない？」
道人「（時計を確認し）十五分なら」

○同・診察室
圭「人との交流が必要だと思うんだよ」
道人「え」
圭「だから、会わせるくらいならいいかな。智子と――」
道人「由依ちゃんに会わせたいなんて言うなよ」
圭「……」
道人「正気か」
圭「じゃあ……どうすれば早く、元に戻る」
道人「圭、これは治療だから」
圭「……」
道人「戻るんじゃない、治すんだ。変わっていくんだよ」
圭、道人を見る。
道人「被害にあった人たちは、まだ傷を癒してる。なのに加害した側は変わらずにいるなんて傲慢だろ。……圭、まずは被害について知ってほしい」
圭「よく分かってるよ……」
道人「分かってない。拒否すること自体、子供にとっては想像以上に難しいんだ」
圭「……」
道人「何十年と消えない傷もある。酷く衝撃的な事だったのに誰にも打ち明けられない。恥だと思わされるんだよ。その子は一切悪くないのに」
圭「恥――」
道人「気付いていない場合すらある……何十年か経ってようやくあれが暴力だったって気が付く場合もあるんだ。圭はそういうの考えてる？」
圭「……考えてるよ」
道人「考えてたらどうしてそんなこと言えるんだよ」
圭「いやそんな」

道人「どうなるか分かってる？」
圭「え……」
道人「ずっとがんじがらめで、もうその事が頭から離れなくて、いつの間にかこっちがおかしいんじゃないかって。こっちの方が悪かったんじゃないかって。その繰り返しなんだよ、人生を通して。……そういうのを、そういうのを……」
俯く道人。
圭「……高木？」
我に返ったように顔を上げ、
道人「ああ……すまん」
圭「いや、大丈夫？」
道人「……問題ない」
圭「……」
高木「とにかく……辛いのはわかるけど、もうそんな考えはやめてほしい」
受け入れるように頷く圭。
道人、安堵したように肩を落とす。
圭「……悪かった、馬鹿だったよ」
と扉の方に向かう圭。
立ち上がり、圭を見送る道人。
圭「ありがとう。……じゃあ」
道人「じゃあ」
圭、出ていく。
道人、扉が閉まると、よろめいて椅子にもたれかかる。
やがて、項垂れるように座り込む。

○同・ロビー
何か考え込むような表情で、出口へと向かう圭。

○同・診察室
ノックする音。
看護師「先生？」
項垂れている道人。
看護師「次の……」
道人「ごめん、ちょっと時間を置きたい」
看護師「……分かりました」

道人「申し訳ない」
道人、どこか奥深くを見ている。
○正敏のアパート・部屋
内職をしている正敏。
ふと、ショッピングバックを見る。
中からポロシャツを取り出し、眺めてみたり、肩に当ててみたり。
玄関が開く音。
驚く正敏。
入ってくる圭。
正敏「圭？」
圭、兄に目もくれず、部屋を見回す。
本棚が目につき、漁り出す。
呆然とする正敏。
宮崎駿、手塚治虫……それらを無視して、少女が表紙の漫画を手に取る圭。
握る手が震えている。
圭「こういうの禁止されてるんじゃないの？」
正敏「え？」
部屋のゴミ箱から袋を引っ張り出し、漫画を突っ込んでいく。
机の上の鉛筆をも袋に入れていく。
正敏「おい……」
正敏が圭を押さえる。
圭、構わずクローゼットに向かう。
戸を開けると、『おみくじ』と書かれた段ボール箱。
こじ開ける圭。
正敏「……」
圭「……」
箱の中、児童ポルノコミックの数々。
圭「もうさ、治らないの？」
正敏、何も答えない。
圭「ねえ」
視線をそらす正敏。
圭「俺が馬鹿みたいだわ」
部屋を探し回る圭。
漫画、ＤＶＤ、すべてをゴミ袋に入れていく。

正敏、放心状態で立ち尽くす。
封を縛り、玄関へと向かう圭。

○同・玄関
靴を履いている圭。
正敏、見ていて。
正敏「……あの、動物園に行くときのあれ買ったんだ」
と部屋に戻ろうとし。
圭「もう、会えないよ」
正敏「え」
正敏、振り向くと、圭が出ていくのが見える。
正敏「……ちょっと待て」

○路上
圭、ゴミ袋を手に歩いている。
正敏、追いかける。
正敏「ちょっと」
圭、構わず歩いていく。
正敏「待てって」
圭「……」
正敏「……家族に！」
立ち止まる圭。
正敏「家族にそんなこと思うわけないだろ……！」
圭「そうとは限らないんじゃない」
冷たく言い放ち、歩き出す圭。
追いかける正敏。
正敏「なんでそんな」
早足になる圭。
正敏、追いかける。
公園に差し掛かり、足を止める正敏。
踏み出せない。
正敏「……お前だってあるだろ。なんかこう、口にしちゃいけないようなこと考えたり」
圭、立ち止まる。
正敏「ダメだダメだって思ってても、手が動いちゃうとか……」
圭、振り返って。

圭「そういう時のために俺がいたはずだろ」
正敏「そうだけど……」
圭「じゃあなんで」
正敏「……それならずっと横にいて、何もしないように見てればいい」
圭「……」
正敏「そうしてくれたら、もう少しマシだったよ」
圭「精一杯やってたよ」
正敏「それで精一杯か」
圭「は？」
正敏「誰にでも言えるようなこと言って、それで精一杯か」
圭「もういい」
圭、去ってゆく。
立ち尽くす正敏。

○マンション・外観（夜）

○同・圭の自宅・居間（夜）
向き合って座る圭と智子。
机に缶ビールと雑に盛られたキャベツ。
智子、小皿の味噌を付けながら、ボリボリ食べている。
智子「（頬張りながら）土曜日まで仕事行かないでよ。由依、寂しがってたよ」
圭「最近、忙しくて」
智子「高木さんじゃないんだから」
圭「あいつほどじゃないよ」
智子「ほんと忙しそうだもんね」
圭「……大変だと思う」
智子「そういえば、お兄さんどう？」
圭「え？（と固まってしまい）」
智子「何そんな」
圭「いや……急だったから」
智子「今日さ」
圭「うん」
智子「夕方の特集で鬱の人のことやっててて」
圭「え」
智子「それでお兄さんのこと思い出して。ど

うなったかなって」
圭「ああ。……まだ一緒には出かけられない
と思う」
智子「そっか。そうだよね」
圭「うん」
智子「まだ酷いの？」
圭「もう少しかかるみたい」
智子「そっか」
圭「……そういうのって」
智子「ん？」
圭「家族が原因だったりするのかな」
智子「え」
圭「いや」
智子、圭をじっと見る。
智子「何かしたの？」
圭「いや、してないけど」
智子「何それ」
智子、キャベツを取りながら。
智子「あ、でもね、特集の人は環境が変わっ
たストレスでそうなっちゃったって」
圭「へえ」
智子「その人のパートナーが心配して面倒見
てるんだけどさ、当人にはあんまり響いて
ないっていうか、もう自分のことで必死っ
て感じなんだよねー」
圭「へえ。切ないな」
智子「ねえー……」
遠い目をしている圭。
智子「なんか、出来ることあったら言ってね」
圭「うん」
智子の皿の上、キャベツの芯だけが溜
まっている。

○飯沼家・和室
ヨシエがピアノを弾いている。
隣で見ている正敏。
戸が開き、恵子が顔を出す。
恵子「ちょっと銀行いってきますね。お義母
さんよろしくね」
ヨシエ「はいはい」

恵子「先生もお願いしますね」
正敏「あ、はい」
戸が閉まる。
正敏「じゃあ、続きから」
弾き始めるヨシエ。
また、戸が開く。
未来が顔を覗かせる。
ヨシエ「あら未来ちゃん」
未来、ズカズカと部屋に踏み込む。
未来「未来もしたい」
椅子にちょこんと座る未来。
正敏「……今はレッスン中だから」
ヨシエ「未来ちゃん、また今度にする？」
未来、気にせず鍵盤に触れる。
正敏「（動揺して）ちょっと……」
部屋に響く、奇怪な音。

○スーパー・駐車場
両手に買い物袋を下げて歩く智子。
車のトランクを開ける。
智子「？」
半透明のゴミ袋がある。
買い物袋を置いて、ゴミ袋を開ける。
智子「え……」
漫画やＤＶＤなど児童ポルノの数々。
唖然とする智子。

○飯沼家・和室
未来がピアノを弾き続けている。
正敏「もうそろそろ……」
と、止めようとする正敏。
弾き続ける未来。
正敏「ちょっと……」
正敏の顔がこわばる。
体がぎこちなく揺れる。
背中に、汗が流れる。
正敏「……やめなさい！」
未来、驚いて手を止める。
正敏を見る。
目を逸らす正敏。

未来「……」
未来、いじけた様子で部屋を出る。
後を追うヨシエ。
正敏、やってしまったと肩を落とす。
ややあって――、
視界に入る、小さな足先。
見上げると、未来が立っている。
泣き出しそうな未来。
未来「おばあちゃんが……」
と、廊下を指す。
急いで廊下に出る正敏。
正敏「……」
ヨシエがうつ伏せに倒れている。

○マンション・圭の自宅・居間
圭と智子が対面している。
テーブルの上にはゴミ袋。
開いた口からは漫画やＤＶＤが見える。
智子「何これ」
圭「……」
智子「怖いんですけど」
圭「いや」
智子「はい？」
圭「違う、これは」
智子、圭をじっと見る。
圭「兄の」
智子「ん？」
圭「だから、兄のです」
智子「……」
圭「……こういうものしか愛せなくて」
智子「え？」
圭「ごめん」
智子「え、ちょっと待って」
智子、考えを巡らせる。
智子「前に話してくれた鬱だって話は？」
圭「ごめん」
智子「ごめんっていうか」
圭「でも、これだってその……一種の病だし」
智子「ただの変態じゃん」
圭「……」

智子、ため息をつく。
智子「なんで一緒に出かけようって話してた時に、言ってくれなかったの」
圭「こうなると思ったから」
智子「本当に一緒に行けると思ってた？」
圭、何も言えず俯く。
智子、ん？　と気づき。
智子「待って、高木さんも知ってたの？」
圭「あいつのとこに通わせてる」
智子、圭のスマホを奪い電話をかける。

○飯沼家・廊下
倒れているヨシエ。
脈を確認する正敏。
スマホを取り出し、急いで１１９に発信する。
正敏「……すみません、救急車お願いします」
横目でヨシエを見ながら。
正敏「ええ、はい。……そうです。おそらく転倒したのではないかと。……見てはいないです。はい。はい。お願いします」
電話を切る。
横たわるヨシエの傍、泣いている未来。
正敏、目を背け、立ち往生する。
徐々に未来の声量が大きくなる。
正敏「……」
圭に電話をかける。
話し中で繋がらない。
何度かかける。が、繋がらない。
正敏の表情が曇っていく。
未来に背を向け、しゃがみ込む。
その肩に、手が触れる。

○マンション・圭の自宅・居間
智子、電話越しに道人と話している。
智子「ねえ、高木さん知ってたんでしょ。え？　うん、そう。（圭を睨み）この人、会わせようとしてたんだけど。うん、でしょ？　うん、うん。そういう人が平気で外歩いてていいんだ？　へえ。知らないけど。

うちの子には近づかせないから」
複雑な表情で座っている圭。

○飯沼家・廊下
肩に載せられた手。
正敏、振り向く。
未来が立っている。
未来「……おばあちゃん、死んじゃう？」
涙を拭う未来。
正敏、未来の手を握る。
正敏「大丈夫……大丈夫だから」
段々と握りしめる手が強くなる。
未来「痛いっ……」
正敏、慌てて手を離す。
未来から離れ、再び電話をかける。
正敏「圭……」
話し中で繋がらない。
頭を抱え、座り込む正敏。
未来の泣き声が、微かに聞こえる。
正敏、むくっと立ち上がる。
正敏「……こっちおいで」
未来を手招きする。
そろそろと、トイレの前に導く。
未来、ぽかんとした顔で正敏を見る。
ダメだ、と正敏、未来から顔を背ける。
と、壁際のメロンの箱が視界に入る。
正敏「……」

○マンション・圭の自宅・居間
電話している智子。
智子「（電話に）彼も闘ってるって……。そりゃ、みんな闘ってるよ。生きてるんだからいろいろあるよ。それでもさ」
圭、唐突に。
圭「あの人にもいいとこあるんだよ」
智子、圭を見る。
圭「智子は知らないけど」
智子「……」
圭「……昔から、ピアノは上手いし勉強はできるし。なんでも知ってるから、全部教え

てくれたよ。俺が上手く弾けたら一番喜んでくれて。そういう……心のある人だよ」
智子「だから？」
圭「え？」
智子「関係ないでしょ、どんな人とか、心とか」
圭「……」
智子「私たちには子供がいるんだよ」
圭「……そうだよ」
智子「優しいと思ってた叔父さんと動物園に行ってさ、もし何かあったら――」
智子、目が潤み出す。
智子「そんな恐ろしいことがあるなんて、まだ知らない子供だよ？」
圭「それはもちろん――」
智子「駄目だよ」
圭「……」
智子「それは駄目だよ」
圭「わかってるよ」
智子、電話に戻り。
智子「ああ、ごめん……うん、ありがとう」
電話を切り、スマホを圭に返す。
圭、画面に目をやる。
と、何件も着信がある。
正敏からである。
顔が徐々に青ざめていく。
圭「まずい……」
焦って、折り返す。
繋がらない。
智子「（不安そうに）なに？」
圭「兄ちゃんが……」

○飯沼家・廊下
正敏、トイレの扉をメロンの箱で押さえている。
スマホの着信が鳴る。
画面を見て、圭からだとわかる。
が、出ずにスマホをしまう。
ヨシエ「先生……？」
はっとして、振り向く正敏。

ヨシエが上半身を起こしている。
正敏の顔が凍り付く。
ヨシエ「私どうしたんだっけ」
正敏「え……」
状況を掴めていない様子のヨシエ。
正敏、トイレの方を見る。
微かに、未来の声がする。
正敏「（大きめに）あ、えっと、あの」
ヨシエ「練習していて、未来ちゃんが来て……」
正敏「……」
ヨシエ「未来ちゃん？」
正敏「あの……救急車！　呼んだんです、呼びました。……なので、ここにいてください」
ヨシエ、問うように正敏をじっと見る。
ヨシエ「どうしちゃったの？　そんな慌てて」
正敏「あ、いや」
ヨシエ、首を傾げる。
正敏「僕は、……失礼します」
逃げるように去っていく正敏。

○道路（夕）
市道を走る自動車。
運転席に圭、助手席に智子。
智子「ね、本当に家にいるの？」
圭「わかんない。けど、とりあえず」
智子「何にも知らないんじゃん」
何か言い返したそうな圭。
智子「行っても仕方ないんじゃない？　こういう時って警察とかにいった方がいいんじゃないの？」
圭「……なんで？」
智子「だって、どうする？　今だって誰に何してるかわかんないよ？」
圭「……」

○路地（夕）
炎天下。
正敏、足早に歩いている。

着信音が鳴る。
画面に「圭」の文字。
正敏「……」
横を救急車が通り過ぎる。
振り向くが、そのまま歩き去る。
○飯沼家・玄関前～廊下（夕）
救急車が飯沼家の前に駐まる。
向かいから恵子が歩いてきて、救急車に気づく。
顔色を変え、玄関まで走る恵子。
ストレッチャーを降ろす救急隊員。
恵子「え……」
救急隊員「この家の方で？」
恵子「ええ、そうです……何が……」
救急隊員「先ほど男性の方からご連絡がありまして」
恵子、慌てて入っていく。
廊下には、上半身を起こしたままのヨシエ。
恵子「お義母さん……！？」
急いで駆け寄る恵子。
恵子「どうしたんですか！」
ヨシエ「ちょっと転んじゃったみたい」
恵子「……大丈夫なんですか？」
足をさするヨシエ。
ヨシエ「なんだか、動かないのよ」
恵子「え……」
救急隊員「失礼します」
入ってきて、ヨシエの容態を確認する救急隊員。
ヨシエ「未来ちゃんが」
恵子「え？」
ヨシエ「いないの、未来ちゃんが」
恵子「え」
ヨシエ「変ねえ」
恵子、周囲を見回す。
恵子「未来―？」
歩みを進めると、遠くに声がする。
未来の泣き声のようである。

恵子「未来？」
不審な表情で、その声の方へ。
トイレの前に着き、引き戸を開けようとする恵子。
開かない。
メロンの箱が挟まっている。
急いで箱をどかし、開ける。
未来が、泣いている。
恵子「どうしたの……？」
恵子、未来を抱きしめる。
何があったのか。
未来の首には、ループタイが下げられている。

○道路（夕）
車内の圭と智子。
智子「本当に家なのかな」
圭「しつこいって。多分そうだよ」
不服そうな智子。
圭「……昨日」
智子「ん？」
圭「昨日、部屋行った時、見たんだよ」
智子「え、何を」
圭「ロープ」
智子「……ロープ？」
圭「死ぬ気かも」
智子「（ふっと笑って）考えすぎだよ」
圭「……」
智子「そんな、死ぬだなんて」
圭「……すればわかるよ」
智子「（聞きとれず）うん？」
赤信号で、車が止まる。
圭「毎週、毎日、電話してみたらわかるよ」
智子、圭を見る。
圭「内容はいつも同じ。今日は、間違えて公園を通りました。子供と目があったような気がしました。公園には彼しかいませんでした。でも僕は何もしませんでした」
智子「……」
圭「今日は、映画を観ていて子供が出てきた

ので、観るのをやめてテレビに変えました。テレビを観てたら子供がおつかいしてました。これなら大丈夫と思って観ていたけど、ダメでした」

絶句している智子。

圭、項垂れる。

圭「俺は、なんて答えたらいいの？」

背後の車がクラクションを鳴らす。

ビクッとする二人。

信号が青に変わっている。

圭、車を発進させる。

沈黙に包まれる車内。

智子「ね、うちに帰ろう」

圭「……何言ってんの？」

智子「戻ろう」

圭、ハンドルを切り、側道のコンビニに駐める。

圭、智子を見る。

圭「なんで？」

黙っている智子。

圭「死ねばいいって思った？」

智子「やめてよ」

圭「じゃあ何？」

智子「……」

圭「俺の兄貴だよ」

智子「知らないよ。自分で選んだんでしょ？好きでそうしたいんならいいんじゃない。仕方ないよ。そもそも、ああいう人が街にいて生活してるって」

圭「普通じゃない？」

智子「そうじゃないけど……」

圭、小さなため息をつく。

智子「……小さい頃ね」

圭「……」

智子「小学生の頃だったかな。下校中に子供に声かけるおじさんが噂になってた」

圭「……」

智子「よく飴とか配ってたらしくて。毒だの何だの言われたりしてて。その頃はただの笑い話だったんだけどね。で、私もとうと

う会ったの。そのおじさんに」
圭の顔がこわばる。
智子「友達と別れて一人で歩いてたら、話しかけられて。最初は普通に無視して歩いてたんだけど、飴いる？って手を差し出されて、つい見ちゃったの。私、親にも見るなって言われてたのに見ちゃったの。皆が噂してるそのおじさんってどんな人なんだろ、何を見ちゃいけないんだろって思って。そしたら、ズボンのチャックが開いてて――」
こめかみをおさえる圭。
智子、深く息を吐く。
智子「怖かった。というか今でもちょっと怖い。親の言いつけ守れなかったなとか、なんであの道通っちゃったんだろとかって、帰りに自分を責めてた」
圭、黙っている。
智子「だからね、そういう思いもう誰にもして欲しくない」
智子、圭の手を握る。
智子「だから、もういいよ。圭ももう頑張らなくていいよ」
智子、圭を抱きしめる。
圭、思うところがあり、目をつむる。
圭「……降りて」
智子「え……」
圭「ごめん……降りて」
智子、複雑な表情。
仕方なく、車を降りる。
車は駐車場を出て、市道に戻っていく。
呆然と眺めている智子。

○正敏のアパート・外観（夕）
表に、圭の車が駐まる。

○同・玄関前（夕）
圭、駆けてきて、インターホンを鳴らす。
何度も鳴らすが、反応がない。
扉を叩く。

圭「兄ちゃん？」
なんの音もない。
圭、正敏に電話をかける。
が、出ない。
もう一度かけ、部屋に耳をすます。
音はない。

○マンション・圭の自宅・玄関前（夕）
智子、とぼとぼと歩いてくる。
扉の前まできて、はっとした表情になる。
正敏が座っている。
立ち尽くす智子。
智子「……お兄さん？」
正敏、智子に気づく。
正敏「ああ、智子さん」
智子「……どうしました？」
正敏「別に。圭は？」
智子「今いないです、っていうか連絡は？」
正敏「いや」
智子「……」
微妙な空気が流れる。
正敏がいて、通れない智子。
智子「……圭、待つんですか？」
正敏「ええ」
智子「……」
二人とも、汗だくである。
智子、痺れを切らし、扉へ向かう。
慌てて立ち上ろうとする正敏に、驚く智子。
正敏「あ、すみません」
智子「……いえ」
正敏の色あせたチノパンの縫い目に、ほつれがある。
智子「（見ていて）……」
扉を開け、中に入る智子。
扉が閉まる。
正敏、変わらず立っている。
少しして、急に扉が開く。
勢いがよく、正敏の肩にぶつかる。

肩を押さえる正敏。
智子「あ、ごめんなさい」
正敏、智子を見る。
智子「……入ります？」
室内を示す智子。

○同・居間（夕）
黙って座っている正敏。
智子、スマホを手に話している。
智子「うん、そう。だから早く。うん」
電話を切り、正敏に。
智子「圭、今から来るそうです」
正敏の斜め前に座る。
正敏、汗を拭っている。
黙り込む二人。
智子「……圭から聞きました」
正敏「ああ、はい」
智子「高木さんのところ行ってるって」
正敏「ええ……」
正敏、床を見ている。
パンダのぬいぐるみが落ちていて。
正敏「いつか行けるといいですね、動物園」
智子、黙っている。
正敏「……」
智子「いつかって来ますかね」
正敏の顔が揺らぐ。
智子「それ、完治する前提で言ってますよね？　そんな日って来るんですか？」
正敏「それは今、治療中で……」
智子「治療はわかります。でも、治ったって誰が判断するんですか？　高木さんですか？　それともご自身ですか？」
正敏「……それは話し合って、徐々にわかってくると思うんだけど」
智子「私、思うんですけどそれ多分、無理なんじゃないかなって。諦めとかじゃなくて、事実として。治らないです、きっと」
正敏、何も言い返せない。
智子「でも」
正敏を見つめる智子。

智子「……変わろうとすることは出来るんじゃないですか？」
正敏「あなたには、わからない」
智子「……」
正敏「あなたは素直に、正直に生きていれば……この社会で生きていける人だ」
智子、険しい顔つきになり。
智子「そんなわけないじゃない」
正敏「僕とは生き方が違う」
智子「想像したことあります？」
正敏「……」
智子「人の生き方、気持ち」
正敏「生き方」
智子「人には……子供にはどんな現実があって、どんな未来があるのか。考えたことある？　ねえ」
正敏「……」
智子「何とか言いなさいよ」
立ち上がる正敏。
正敏「……すみません、帰ります」
智子も、立ち上がる。
玄関へ向かおうとする正敏。
智子「そうやって逃げてきたんですか？」
正敏、立ち止まる。
智子「いろんなこと見ないふりしてきたんですか？」
正敏「……」
智子「圭があなたにどれだけ時間とお金使ってるか知ってます？　今日だって私、車降ろされて、……それはまあいいや。でも圭も、高木さんだって、あなたのこと考えてるんじゃないですか？」
正敏「それでどうにかなるものでもないから」
智子「どうにかならなかったら、話せばいいじゃないですか。私も嫌なことあったら圭に話して、ちょっとスッキリしたりして。そんな日いっぱいありますよ」
正敏「……」
智子「だから話せばいいんですよ」
正敏「わかってないですよ」

智子「え？」
正敏「僕は智子さんが想像しているより、ずっと酷い人間です」
智子「……」
正敏「どうしますか。この世の大人たちが全員死ねばいいと思ってるって言ったら。受け入れられますか」
智子、首を横に振る。
智子「私……そもそも、受け入れるなんて言ってないです。ただ話を聞いて、なんて言うか……黙認する。そういう人がいるってこと」
正敏「……」
智子「受け入れるなんて、買い被りすぎです」
正敏「……」
智子「私があなたにそうするように、あなたにも自分の気持ちを……黙認してほしいなって思います」
正敏「そう簡単に――」
智子「簡単じゃない。――あなたに簡単じゃないように、私にも簡単じゃない」
智子、真っ直ぐな目で正敏を見る。
正敏「……僕には無理だ」
うつむく正敏。
智子、それでも見つめる。
智子「無理なんかじゃ――」
不意に棚の上の子機を取り上げる正敏。
智子に差し出す。
智子「え」
正敏「警察」
智子「え？」
正敏「……通報してください」
戸惑う智子。
正敏「僕みたいな人間は刑務所にいた方がいい」
子機を持つ手が震えている。
正敏「もう誰の目にも入らなくて、何にも怯えなくていいところに……」
智子「そうじゃないでしょ」
正敏「……」

智子「入ってもまた出てきて、それでまた入るんですか？」
正敏「……」
智子「そういうことじゃないんじゃないですか？」
正敏「……」
智子「それ自分で一番わかってるんじゃないんですか？」
玄関の開く音がする。
入ってくる圭。
対面している二人を見て驚く。
圭「……何かあったの？」
黙っている二人。
焦り出す正敏。
正敏「ああ……謝らないと」
圭「え？」
正敏「……女の子が」
智子「……え？」
正敏「トイレに……」
言葉を失う智子。
智子を見る正敏。
正敏「ほら、だから僕は――」
圭、正敏に近づく。
圭「どこ？」
正敏「……」
圭、正敏の肩をゆする。
圭「どこにいんだよ！」

○同・駐車場（夕）
圭が正敏を引っ張ってくる。
後ろから、智子が追う。
圭、助手席に正敏を無理やり詰め込み、運転席に座る。
助手席の窓を、智子がコンコンとつつく。
窓を開ける正敏。
智子「――許せないです」
窓が全開になり、智子の顔がしっかりと見える。
泣きそうでいて、しかし眼光鋭く。

智子「許せないけど――」
正敏、下を向く。
智子、正敏の肩を掴む。
智子「分かろうとすることは出来ると思う」
急いで窓を閉め出す正敏。
智子「だからあなたも――」
窓が閉まっていき、腕がぶつかる。
智子、正敏から手を離す。
複雑な表情の圭。
智子に目配せし、車を発進させる。
立ち尽くし、背中を震わす智子。
背後に、幼稚園バスが止まる。
智子、涙を拭う。
笑顔で降りてくる由依。
智子、由依を思い切り抱きしめる。

○道路（夕）
車内、圭と正敏。
圭「……ピアノの先生？」
正敏「ああ」
圭「聞いてないんだけど」
正敏「……」
圭「その子を閉じ込めたの？」
正敏「そう」
圭「……何もしてない？」
正敏「うん」
圭「本当に？」
正敏「何もしてない」
ため息をつく圭。
圭「智子と何か話したの？」
正敏「いや」
圭「ん？」
正敏「あの人は……いい人だと思う」
圭「え？」
それ以上、何も言わない正敏。

○飯沼家・表（夕）
車が玄関前に止まる。
圭、車から出て。
圭「俺、行ってくるから」

前を見据える正敏。
圭「一緒いく？」
正敏、強く首を横に振る。
呆れたように、去ってゆく圭。
○同・玄関前（夕）
圭、門をくぐり、インターホンを鳴らす。
扉が開き、恵子が出てくる。
恵子「はい？」
圭「あの、そちらにお子さんがいらっしゃると思うのですが」
戸惑う恵子。
恵子「ええ、いますけど」
圭「えっと、どうされてます？」
恵子「はい？」
圭「いや僕、岡部の、岡部正敏の弟で」
恵子「先生の？」
圭「はい。その、娘さんには大変……」
恵子「娘？」
圭「あ、その、実は兄は……」
言いかけた時、現れる未来。
恵子「あ、未来ちゃん。先生の弟さんですって。ご挨拶は？」
未来「こんにちは」
行儀よく挨拶する未来。
首元のループタイが揺れる。
圭「これ――」
未来「せんせーにもらった」
圭、しゃがんで触れる。
未来、微笑む。
未来「一等賞のメダルなんだってー」
恵子「ごめんなさいね、先生とかくれんぼしてたとか言って。（未来に）ほら、返しなさい」
取ろうとすると、嫌がる未来。
圭「あ、結構ですよ……」
恵子「すみません」
恵子、辺りを見回す。
恵子「先生は？」

圭「えっと……」
恵子「救急車、先生が呼んでくださったんでしょう？　どうしてついていて下さらなかったの？」
圭「すみません……ちょっと気が動転してしまったようで」
恵子「そうなの？　もう本当にびっくりした、お義母さんは倒れてるわ、先生も未来もいないわで」
圭「本当にすみませんでした。その……容態は？」
恵子「骨折ですって」
圭「……」
恵子「元々、弱ってたみたい」
圭「……そうですか」
恵子「しばらく入院なの」
圭「え……」
恵子「まだ先は決まって無いけど」
圭「本当にすみませんでした……」
深く頭を下げる圭。
圭「よかったら、入院費払わせて下さい」
慌てる恵子。
恵子「何もそこまで気負わなくていいんですよ」
圭「いやでも……」
恵子「あの状況で先生にできることはなかったの」
圭「……」
恵子「ただ、もうピアノは当分出来ないのでね」
圭「ええ」
恵子「先生にも、そう伝えといてくださる？」
圭「はい……」
恵子、軽く会釈し扉を閉める。

○同・表（夕）
車に戻り、運転席に乗り込む圭。
正敏「どうだって」
圭「大丈夫だった」
正敏「ヨシエさんは？」

首を振る圭。
正敏「え……」
圭「そんなに心配なら、離れなければよかったろ」
正敏「……」
圭「もうここには二度と来るなよ」
正敏「……分かってる」

○車内（夕）
市道を走る車。その車内。
圭と正敏、黙っている。
圭「ループタイがメダルって」
正敏「……」
圭「そうやってうまく言いくるめたんだ？」
正敏「……」
ため息をつく圭。
車内に鬱屈とした空気が流れる。
正敏、窓の外を眺める。
道沿いに、木村楽器店が見える。
店から、グランドピアノが運ばれてゆく。
正敏、諦めの笑みを浮かべる。

○正敏のアパート・表（夕）
圭、車を駐める。
正敏「ありがとう」
車を降りようとする正敏。
圭、何か言おうと、その手を掴む。
正敏、握られた手を見る。その目。
圭、思わず手を引く。
圭「……」
正敏、寂しげに扉を閉める。
アパートの階段を上っていく正敏。
見つめる圭。

○同・キッチン（夕）
シンクの上、メロンが腐っている。

○同・部屋（夕）
ベッドに横たわる正敏。

生気のない表情で、天井を眺める。
スマホを取り、留守電を再生する。
圭の声「兄ちゃん、どこいるの？　場所だけでもいいから教えて？」
次の留守電。
圭の声「家着いたけど、いる？　どっか行っちゃった？　……連絡ください」
次の留守電。
圭の声「……俺、どうしたらいい？　どこ向かえばいい？」
正敏「……」
正敏、すくっと起き上がる。
×　×　×
椅子の上、正敏が立っている。
手にはロープ。
天井を確かめている。
何か、覚悟したような表情。
深く息を吸って吐く。
正面を向く。
と、窓から向かいの夫婦が見える。
赤子を抱いている。
そのぷっくりとした手足。
正敏「……（見入っている）」
正敏、険しい表情になる。
目に涙が滲む。
居たたまれず、椅子を降りる。
窓辺に向かう。
赤子と夫婦、穏やかな笑顔の老夫婦に囲まれている。
包まれている赤子。
正敏、声を殺して泣いている。

○同・表～玄関前（夕）
車内、運転席で思い詰める圭。
ハンドルに手をかけようとしたとき、
バックミラーに人影が見える。
赤子を囲んだ幸せそうな家族。
圭「……」
車を降りる圭。
階段を上り、部屋の前に立つ。

耳を澄ましてみる。
中から、バタバタと音がする。
一瞬静まり、やがてロープを縛るような音。
圭、表情が曇る。
何かを察し、諦めたように扉にもたれかかる。
どん、と重みのあるものが落ちる音。
涙を堪える圭。
潤んだ視界、階段の溝に転がっている蝉が映る。
もう二度と動かないように見えたその羽が、微かに動く。
圭、何か決意し、立ち上がる。

圭「兄ちゃん？」
扉を思い切り、叩く。
圭「何してんの！　ねえ！」
何度も何度も叩く。
耳を澄ます。
部屋から音は聞こえない。
遅かったか、と俯いた瞬間、扉が開く。
顔を出す正敏。

圭「……」
正敏「？」
手にはロープで括られた電子ピアノ。
圭「……何それ？」
正敏「捨てる」
圭「え？」
微動だにしない正敏。
圭「大事なものじゃん」
正敏「駄目なものは、全部捨てる」
圭「駄目って」
正敏「駄目なんだよ」
圭「……」
正敏「じゃあ」
扉が閉まる。
圭、放心したように立っている。

○飯沼家・居間
恵子、テレビでニュースを見ている。

未来、ソファでゲームをしている。
アナウンサーの声「あの政治家に、さらに児童売春疑惑が浮上しています」
恵子「やっぱりね」
恵子、ふと未来を見る。
恵子「ねえ。この前なんで泣いてたの？」
未来「泣いてないよ」
恵子「泣いてたじゃない。ほら、おばあちゃんが病院行った日」
未来「だって、先生がどっかいっちゃうんだもん」
恵子「ね、本当にかくれんぼしてたの？」
未来「うん。上手にできるようにメダルくれたの」
恵子「本当？　痛いことなかった？」
未来「痛いことないよ」
恵子「……」
恵子、机の上のループタイを手に取る。
疑念の表情で、ゴミ箱に捨てる。

○さらりクリニック・ロビー（夜）
受付内でカルテを見ている道人。
智子、入ってくる。
道人「（智子に気付き）……」
会釈する智子。
道人、会釈を返す。

○同・診察室
智子と道人が向かい合う。
智子「……この間は電話で酷いことを言いました。ごめんなさい」
道人「いや、こちらこそ……ずっと隠してきてしまって」
智子「ううん。高木さんに頼り切ってた私たちが悪かったんです、きっと」
首を振る道人。
道人「言わない方がいいと思ってた。……でも望まなくとも二人は同じ……共同体に居る訳だから、関係ない振りは出来ないわけで……」

智子「……」
道人「患者が良くなる事を願いつつ、どこまで踏み込むべきか判断出来てなかったんです」
智子「……私だって、そうしたくなると思う。でも高木くんはこの場所でずっと向き合ってた」
道人「……」
智子「簡単に判断出来なかった訳でしょ。私なんてあの時だいぶ感情的になってて……」
道人「それが最初の反応だと思います。僕だって冷静になれたのは随分と後からですから――」
智子「……高木くんは強いよ、やっぱり。私は無理。どこかで受け入れられないこともあるって思っちゃう」
道人「……医者は強いって思われがちで、確かにそういう面も否定は出来ないんですけど、それだけじゃないと思います。……僕は何というか……示してる。ここに居たよって。傷ついた自分が居たってことを」
智子「傷ついた？」
道人「僕も暴力の怖さを知っているから」
智子「それって――」
道人「（頷いて）だからこうして向き合ってる。どうしてあんなことが起きなければならなかったのか、知りたかった。解決する糸口を見つけたかった」
智子「……」
道人「どこかにその道があると思っているのかもしれません。それに、これだけあの人たちの行動に疑問を抱けるのも僕だけだ、って思ってて」
智子「そっか……」
道人「だから、傷ついたことを示し続けて。何と言うか、毎日、穴に落とされた自分を照らしている気分なんです。同じ光で患者さんたちの事も照らしてる」
智子「……うん」
道人「……すみません、何か」

智子「ありがとう。……私に言えるのはそれだけ。一緒に照らせたらいいんだけど、出来ないから、せめて」

微笑する道人。

智子「……さっき」

道人「？」

智子「解決する糸口って言ってたけど」

道人「はい」

智子「……ちょっと相談したい事があって」

道人「相談？」

智子「私もあれから、いろいろと調べたの。そうしたら、加害者にＧＰＳをつけたって記事を見つけて」

道人「え」

智子「出来ないかな、そういうの」

道人「――」

○道

虫取り網と籠を持った子供たちが駆けてゆく。

○さらりクリニック・診察室

薄明るい部屋。

道人と正敏が対面している。

道人「あの日あったこと、話せますか？」

正敏「……」

道人「何があったんですか？」

正敏「圭から聞いたんですか？」

道人「ええ。ご自身からお話いただけますか？」

正敏「……何も」

道人、正敏を見る。

正敏「何も知らなかった。あの家にいるなんて」

道人「可能性も考えなかったですか？」

うつむく正敏。

道人「どんなことでもいいので話していただけませんか？　あなたが感じたこと」

正敏「……僕は、我慢したんです。……あの子はまさに僕の……（首を振って）けど、

我慢したんです」
道人「……」
正敏「何もしたくなかった。何もしないように、誰も傷つかないように、閉じ込めた」
表情を変える道人。
道人「そういう時は圭に電話するようにって」
正敏「何度もかけました」
道人「……」
正敏「でも出なかった」
道人「……とにかく、手を出さなければいいってもんじゃないんです」
正敏「じゃあ、どういうもんなんですか」
道人「はい？」
正敏「僕はこの先、何も出来ないまま生きてくもんなんですか」
道人「いや」
正敏「最初にここにきた時に言いました……僕の生きる理由はこれしかない。このために生きてるんだと思って今日までできた……そう言ったはずです」
道人「いや、なのでそれを徐々に変えていきましょうと……」
正敏が道人を見据える。
道人「……そもそも、なぜ子供がいるって分かった時点で辞めようと思わなかったんですか？」
下を向く正敏。答えない。
道人「とにかく、ちゃんと生きてもらわないと困ります……。あなたには音楽がある。だからそれを続けるために頑張りませんか」
道人、微笑して。
道人「前に、話してくれたじゃないですか。音楽が笑いかけてくれる時があるって」
正敏「……」
道人「そういうのを大事にしましょうよ」
正敏「だけど結局、僕だけのものってないから」
道人「はい？」
正敏「どこに行っても僕だけに与えられたものはない」

道人「……」
正敏「僕は悪くない」
苛立ったように、膝をゆする正敏。
正敏「僕はずっと我慢してたのに、あの子から近づいてきたんだ」
道人「はい？」
正敏「あの子がピアノを弾きたがったんだ」
思わず、立ち上がる道人。
正敏に背を向けて、デスクの方へ。
正敏「でも僕は我慢した」
道人の表情が歪む。
正敏「僕はあの子の前で大人だったんです」
道人「……」
正敏「あの子が、どんな目で見てこようと、あの小さな手が僕の肩に触れようと。自分を律したんだ。……閉じ込めることで、守ったんだ」
デスクの筆立てが、道人の目に止まる。
正敏「それでも、僕が悪いですか」
道人「……」
正敏「……結局、僕を傷つけることには誰も無自覚なんだ」
道人「……」
筆立てに手を伸ばす道人。
カッターナイフに触れる。
手に取り、強く握りしめる。
正敏「僕の傷には誰も見向きもしない」
道人、悶えながらポケットにしまう。
道人「……あなただけじゃないです」
正敏、道人を見る。
道人、棚のファイルを指して。
道人「ここには被害者たちの声があります。あなたのこんなすぐ近くに。今すぐ開いて見せることだって可能です。本当はそうしたいくらいにあなたは何も分かってない。でも、プライバシーというものがある。彼らの声は守られている。本来、人の領域というものはこれほど守られていなければならないものなんです」
正敏「……」

道人「もし、それでも分からないのであれば、聞かせます。十何年もずっと、何度も何度も、思い返してきた私の話を」
道人、正敏を見る。
道人「そんなことしなくても、人の傷を想像できませんか？」
部屋が沈黙に包まれる。
正敏「……さっき」
道人「え」
正敏「さっき、ポケットに何入れたんですか」
正敏、道人を見つめる。
正敏「見えました」
道人「……」
正敏「何、入れたんですか」
道人、目の色を変える。
正敏「何ですか」
再び、沈黙。
道人「僕の中にも龍がいる」
正敏「……」
道人「そんなことを言った患者さんがいました。龍がいて、いつどんな時に暴れるかわからない」
ポケットからカッターナイフを取り出し、正敏に向ける。
道人「でも、コントロールしている」
道人、腕を下ろす。
道人「……僕は殺さない選択をして、この道に辿り着いたんです。その道の先で殺してしまうわけにはいかない」
道人の手から落ちるカッターナイフ。
道人「今まで僕が診てきた人たち……僕が診てても、また駄目になった人がいる。駄目になった人に傷つけられた人がいる。そういう罪を共有している限り、僕はあなたを殺せない。それは許されないです」
正敏、道人を見ている。
道人「例えどれだけ、あなたがこの先、衝動に負けそうになっても。その裏には、僕がいる」
正敏「……」

道人「あなたが道を歩く、ご飯を食べる、ピアノを弾く、その背中に僕がいるんです」
正敏「……」
道人「腹が減ったら食う、眠くなったら寝る。全部、他の者に害を与えてやることじゃ無いんです」
道人、息を整え、デスクに向かう。
道人「さっきあなたは、僕だけのものは無い、そう言ったけどありますよ」
正敏、床に落ちたカッターナイフを見ている。
道人「あなた自身は、あなただけのものです」
そっと手を伸ばす正敏。
道人「あなたの龍をコントロールできるのは、あなただけなんです」
正敏「……」
正敏、伸ばした手をゆっくりと引く。
道人、正敏のカルテを手に取る。
正敏を向いて。
道人「以前、ブルックナーが好きだって仰ってましたよね」
正敏「……」
道人「僕も好きなんですよ。来週は彼の音楽の話をしましょう」
正敏「……なんで」
道人、正敏を見る。
正敏「なんで僕みたいなのの相手してるんですか」
道人「……」
正敏「なんで」
カルテを強く握りしめる道人。
正敏の目の前に差し出す。
道人「あなたが加害した子供……この子は大人になって、何年も経った後に思うんです」
正敏「……」
道人「なぜ僕だったの、なぜ私だったの。……どうして自分があんな目に遭ったの、どうしてこの傷は癒えないの、どうしてこの苦しみは消えないの、どうしてどうしてどうして――、って」

正敏「……」
道人「それが一生続くってことです」
道人、正敏を見据える。
道人「これを背負うのは、あなたを守るためじゃない。もうこれ以上、そのどうしてを増やさないためです」
正敏、俯いていて、表情は見えない。
それでも、道人は正敏を見ている。

○マンション・圭の自宅・居間
圭と智子、向かい合って座っている。
床で眠る由依を眺める圭。
智子、紅茶を淹れている。
二杯分、同じティーバッグ。
片方だけ明らかに色が薄い。
圭「新しいので淹れてよ」
智子「節約」
圭「え？」
智子「まだ、治療続くんだし」
圭、智子の目を見る。
智子「私たちがちゃんと見ておかないと」
智子、薄い色の紅茶を飲む。
圭「……」

○パチンコ店・施設内
騒がしい店内。
作業服姿の正敏が、パチンコ台を布巾で磨いている。

○同・駐車場
掃除をしている正敏。
側道を自転車の少年たちが走る。
正敏、音に反応する。
が、何もなかったように掃除を続ける。
箒でゴミをちりとりに入れていく。
煙草の吸い殻、汚れた馬券。
そして、蝉の亡骸。

〈了〉